

聖書日課 『からし種』 2023.6.11-6.18

<p>6月11日 (日) Ⅱ 列王 9章</p>	<p>「油の壺を取って彼の頭に注いで言いなさい。『主はこう言われる。わたしはあなたに油を注ぎ、あなたをイスラエルの王とする』と。そして戸を開けて逃げて来なさい」(3節)。預言者エリシャに仕える若者が受けたとんでもない使命。神の代理者として將軍を王に任命し、すっ飛んで逃げる。「狂った男」のように召命を果たした彼の必死さがイスラエルを動かした。</p>
<p>12日 (月) Ⅱ 列王 10章</p>	<p>「しかしイエフは、心を尽くしてイスラエルの神、主の律法に従って歩もうと努めず、イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪を離れなかった」(31節)。最強の戦士で策士のイエフでさえも離れられなかった「ヤロブアムの罪」とは、二つの金の子牛が示す「頂点に立った者が抱く転落への恐れ」か。主のみことばこそがわたしたちを恐れから解放してください。</p>
<p>13日 (火) Ⅱ 列王 11章</p>	<p>「そこでヨヤダが王子を連れて現れ、彼に冠をかぶらせ、掟の書を渡した。人々はこの王子を王とし、油を注ぎ、拍手して、『王万歳』と叫んだ」(12節)。祭司ヨヤダは王子ヨアシュを王として立てる際、油を注ぐ前にまず掟の書を渡した。ダビデの子孫といえどもこれまでのように国に流血と恐怖を招いてしまわないため、神の掟を知ることが第一に必要なのだろう。</p>
<p>14日 (水) Ⅱ 列王 12章</p>	<p>「祭司ヨヤダは一つの箱を持って来て、その蓋に穴をあけ、主の神殿の入り口の右側、祭壇の傍らにそれを置いた。入り口を守る祭司たちは、主の神殿にもたらされるすべての献金をそこに入れた」(10節)。何と単純な献金箱。しかしそこに人々が献げ、祭司たちが守り、王の書記官と大祭司が数えたその建築献金で、工事担当者も労働者も忠実に働いた。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.6.11-6.18

<p>15日 (木)</p> <p>Ⅱ 列王 13章</p>	<p>「エリシャが死の病を患っていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュが下って来て訪れ、彼の面前で、『わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ』と泣いた」(14節)。さまざまな奇跡を行い、イスラエルの王に「父」と頼られた預言者エリシャにも、主はその人生を閉じる時を備えておられた。彼は最後までイスラエルの将来を案じていた。</p>
<p>16日 (金)</p> <p>Ⅱ 列王 14章</p>	<p>「しかし、(ユダの王ヨアシュの子アマツヤは)モーセの律法の書に記されているところに従い、殺害者の子供たちは殺さなかった」(6節)。このアマツヤは後年思い上がって失敗も、最後は謀反で殺されてしまった王だが、「律法に従って」復讐の手を途中で止めたことが明記されているのは、南北イスラエルの歴史を通じてこの王だけではないだろうか。</p>
<p>17日 (土)</p> <p>Ⅱ 列王 15章</p>	<p>「主はかつてイエフに『あなたの子孫は四代にわたってイスラエルの王座につく』と告げられたが、そのとおりになった」(12節)。イエフと子孫たちが四代王座につけたのは、主が彼らを用いようとされ、忍耐されたからではないだろうか。主がわたしに与えられた命はイエスの命で贖われたもの。ダメなわたしを忍耐してくださる主に、どのように用いられていこうか。</p>
<p>18日 (日)</p> <p>Ⅱ 列王 16章</p>	<p>「アハズ王は、アッシリアの王…に会おうとしてダマスコに行き、ダマスコにある祭壇を見た」(10節)。アハズ王の第一の関心は、アッシリアに取り入り、その力添えで自国の安泰を確保すること。だからアッシリアの神礼拝を真似することに何の良心の呵責も感じなかったのだろう。その点で私たちの神礼拝はどうだろうか。第一のものを第一にできているだろうか。</p>